

**今こそ聞きたい！「非認知能力」を育む乳幼児・小学生の子育て講座
「どうする？子どもの『はじめての100か月』」【前半】**

【タイトル及び講師プロフィールの表示】（0分0秒～0分30秒）

：音楽のみ

【スライドなし】講師挨拶など（0分31秒～1分51秒）

皆さんおはようございます。京都教育大学の古賀と申します。今日は子どものはじめての100ヶ月ということでお話をさせていただきますけれども、ちょっとドキッとするタイトルをつけさせていただいております。「どうする？」って、そこが難しいところなわけですが、私は普段は京都教育大学という教員を養成している大学に在籍して、学生の教育をしておるんですが、それと同時に研究もしております、その保育者の専門性っていうところで研究をしておりますので、かなりこの現場の保育とか幼児教育、今日は保育幼児教育同じ意味で使っていきますけれども、現場の先生方と一緒に研究をしたりだとか、私が先生方の研究をさせていただいたりだとかいうことをしております。で、その中で色々なことを感じてきた話も含めて、それからエビデンスに基づいてお話をするというので、色々なちょっと小難しい話も出てくるかもしれませんが、ちょっと熱くなると早口になるので早口にならないように気をつけながらお話をしたいなという風に思っております。よろしくお願いいたします。

【スライド①】どうする？子どもの「はじめての100か月」（1分52秒～1分56秒）

では、行きたいと思います。

【スライド②】概要（1分57秒～2分51秒）

概要、この3つになりますけれども、何の写真かなという風に思われるかもしれませんが、これは、ジャックと豆の木のお話は皆さんご存知かなと思いますけれども、ジャックと豆の木のあの豆のモデルになったらしいです、このナタ豆っていうぐんぐん伸びていく豆を育てた写真ですが、その子のお話はちょっとまた後ほどさせていただこうと思っております。これ、下にあるのが、実際のナタ豆です。で、幼児教育の話と、子どもさんの育ちの話を、今日はちょっと2つしていきますので、ちょっと時間が気になるところなので、次々行きたいと思いますが、初めの100ヶ月の大事なことっていうこと。

【スライド③】「はじめの 100 か月」のだいじなこと（2分52秒～2分57秒）

で、「はじめの 100 ヶ月」。

【スライド④】「はじめの 100 か月？」（2分58秒～5分34秒）

これ、鍵かっこをつけてるんですけれども、この鍵かっこ、なんでついているかといいますと、子供家庭庁「はじめの 100 ヶ月の育ちビジョン」っていうのの二次元バーコードを貼らせていただいております。こちらはですね、この間の 12 月に社会に向けて発信されたものです。で、はじめの 100 ヶ月っていうものが、こども家庭庁で今推しているのも、今日のタイトルにも入ってるんですけれども、なぜ推してるかっていうと、この 100 ヶ月っていうのがすごく大事だからですね。で、今日、皆さん、まさにそこに関心を持たれてお集まりだと思えるんですけれども、はじめの 100 ヶ月って生まれてからの 100 ヶ月ではなくて妊娠期の 10 ヶ月も含めてで、そこから計算していて、100 ヶ月ってどのくらいの時を言うかということ、小学校に入って半年ぐらいの頃のあの辺りなんですね。なので、こども家庭庁の幼児期の育ち部会っていうところまで策定したビジョンなんですけれども、幼児期からちょっとやっぱこの接続も含めて、小学校との接続も多分皆さんご関心のあるところだと思います、このまま行って大丈夫かなとか、幼児期にもっとこうしておいたら良かったんじゃないかって後から思いたくないとか、色々なことがあると思うので、何をどういう風に、例えば、小学校に入るまでに準備しておいたらいいかとか、そういうことが関心としては、色々とお有りかなという風にも思います。で、そこをつなげてみていくっていうことで 100 ヶ月っていう風にビジョンの名前を、これ副タイトルなんですけれども、つけたところです。なので、そのはじめの 100 ヶ月っていうことを大事にしていこうねっていうのを今発信しているところなんですけれども、この二次元バーコードで飛べるようになってるのは、最も簡単な資料が出てきますので、読みやすいかと思いますので、是非お時間ある時に見ていただけたらと思いますけれども、100 ヶ月は人格形成をする基盤となっているものだという非常に大きなことが出てきます。で、幼児期は、元々そういう風に色々な法律の中にも書いてあるんですけれども、人格形成の基盤を培うっていう位置付けのものです。ですので、それを私たちというか専門家は知ってたわけですけど、それを社会に広く理解してもらうっていうことに今こうチャレンジしていこうということなわけです。

【スライド⑤】子どもは生まれながらの権利主体（5分35秒～8分00秒）

で、それはどうしてかと言うと、子どもの権利保障っていうのがやっぱりすごく大事だっていう風に改めて言われるようになりました。児童の権利っていうのは、元からあるものですけれども、でも、悲しいことにやはり虐待のニュースは毎年聞かない年はないわけで、で、そういうその子どもの権利っていうのをやっぱりこう社会的に大事なものとして受け止めるというか大事なものとしていこうねっていう、みんなで共通理解していこうねっていう、そういうこうことを社会の、要するに子どもを育てている人だけではなく子育てに関わってる・教育に関わっている人だけではなくて、社会一般に広く理解してもらおうっていうことで今発信をしているところです。で、その中では、今色々関心も高まってます、多様性の尊重であるとか、もちろん、安心安全に生きるとかいうようなことも入ってわけですから、子どもの成長・喜びを実感すると、今日もね、あのお子さんを連れて来てくださって本当にありがとうございます、その子どもの成長・喜びを実感するっていうことが子育てする人だけではなくて、もちろん子育てする人にも実感してほしいんです、もう大変大変っていうこともたくさんお有りだと思うんですけれども、でも、その中で、こんなに楽しいってやっぱり子どもがいることで広がっていく喜びとか楽しさとかいうことがあると思うので、そういうことを実感してもらいたいなって思っていることと、それを社会一般にも広くやっぱりそこを共感して共有していきたいという風に今もあの発信をしているっていうことですね。で、今日の焦点は、この中の子どもの思いや願い、主体性の尊重というところと、これはビジョンを見てもらおうとこれが基本的な理念としてこう書かれているもののポイントを私が勝手に抽出したというものですので、ご参考までに申し上げますけれども、はじめの100ヶ月の育ちビジョンそのものを見ていただきますと、これがざーっとこう書いてあるという感じです。で、今日の焦点は、この2つです。「子どもの思いや願い、主体性の尊重」そして「育ちの質の保証」、この2つが、子どもが生まれなりに持っている権利主体として見た時にとても大事です。それをどうやってやっていきましょうかっていう話になります。

【スライド⑥】アタッチメント（8分1秒～10分13秒）

で、はじめの100ヶ月で大事なことで、このビジョンに書いてあることの大きな重点の1つはアタッチメントを大事にしましょうねっていうことですね。で、アタッチメントってお聞きになったことがある方が多いかなと思うんですけれども、アタッチってくっつくことです。で、怖いって思った時にくっつける人がいるっていうことですね。あれ、あ、そうだ、こっちでご機嫌よく遊んでいるっていう状態があります。で、ご機嫌よく遊んでる状態の時に探索する

ってということが幼児は起こってきますね。で、探索する時は安心して、で、ちょっと拠点となる人から離れていくわけです。で、離れていて平気なんだけど突然なんかがやってきた時に「はっ」て思って「びくっ」てなって怖いと思った時に、そのくつつく人がいるで、そこまで戻ってきて、くつついたら安心することができるっていう、そういうその養育者との感情の絆のことをアタッチメント、愛着関係とも言いますけれども、その安心感を取り戻そうとするっていう傾向のことをアタッチメントと言います。で、それがいろんなところに探索活動というか、それこそね、動けるようになったら、もうあれも触りこれも触り、これとかじりっていう風になっていきますけれども、そういうことを探索していくってことが、子どもが社会を知ること、世の中を知ることになっていくわけなので、とても大事なことなわけです。けれども、その探索をする時の安全基地になるのが、この養育者との感情の絆というものです。なので、色々なところに探索して行って知っていくことがそれこそ子どもの成長につながっていくわけです。なので、それ、すごく大事なことですけれども、困ることもね、色々出てきますけれど、なので、そこをこう、ちゃんと安定していただけるかどうかっていうのが、実はその後の人生にも影響するねってことが研究で分かっているわけです。

【スライド⑦】アタッチメントのタイプ（10分12秒～12分5秒）

で、これはテキストなんか載っているような内容なので、どこかで調べてもらったらすぐ出てきます。安定している型と不安定型、それがその回避型とアンビバレント型、ちょっと中身を読んでもらうと分かるかなと思いますけど、これ、要するに養育者、基本的にその愛着関係を形成していると想定される養育者と、一室にいる状態から、その他の人が来て、そこからその養育者がちょっといってくるねって言っていなくなった時にどういう反応するかっていうので、研究的には見ていきます。で、その時にいなくなったらやっぱり不安になりますよね。保育所とかでもやっぱり最初はね保護者の方と別れる時に最初はわけわからないのでふーんとしてますけど、なんか1週間2週間経ったら、あ、ここでお母ちゃんお父ちゃんいなくなるんだって分かったらもうその前からわーって泣くようになってきますね。で、そういう泣いて抵抗したりするんだけど、比較的容易に、先生方がこういろんなところに連れて行ったり、なんか見せたりとかしているうちに気持ちが落ち着いてきて遊びとか探索に向かう。で、お迎えに来てくれたらまた喜んで寄っていくっていうのが安定型タイプですけれども、そうじゃないタイプのお子さんもいるので、そういったタイプ分けっていうのをして研究的にはこう見ていくっていうのを今までやってきています。で、再会する時にこう一定のパターンがないとかいうよ

うなお子さんもいて、その予後って言うんですけれども、その人が何年か後にどういう育ちを見せているかっていうようなことを研究では取り扱っていくわけです。

【スライド⑧】乳幼児期のアタッチメントの重要性（１２分６秒～１３分３３秒）

で、そういった研究を様々それこそ山ほど読み切れない研究がありまして、その研究の中で分かっていることを、最近、色々な研究をまとめて見るメタ分析っていうのが進んできてるわけですが、その中でもやっぱり乳幼児期のアタッチメントってその後の人との関わりの型みたいな、内作業モデルっていう風な言い方を専門的にはしますけれども、になっていくんだねっていうことが分かって、確かめられてきているっていうところでもあります。で、14ヶ月から45ヶ月ぐらいまでの親の適応的な育児スタイルがある場合は愛着が安定的になりやすく、そして56ヶ月時点での道徳性、良心の育ちっていうのは、今日はね非認知能力っていうところに焦点が当たってるんですけれども、道徳性っていうのは、人とどうより良くあるかっていうことですね、自分1人が良ければいいのではなくて、社会の中で、どうよりよく人との間でどうよりよく生きていくかっていうことです。これすごく大事なことなわけですが、その愛着が安定しているお子さんをその後追っていくと、そういうその人との間でよりよく生きようとする力っていうのが育っていることが多いというようなことが分かっていたり、

【スライド⑨】ミネソタ長期縦断研究（１３分３４秒～１７分２１秒）

こういう研究は、要するに長期に1人の人を追っていくっていう長期縦断研究という言い方をするんですけれども、ずっとその幼い頃から10年20年30年って追っかけていってその人がどんな大人になっているか、どんな大人の生活で、例えば、幸せに過ごしてるかとか、豊かに過ごしてるかとか、経済的に豊かに過ごしているかとか、そういうことを見ていくっていう研究がなされてきましたが、どうしてかって言うと皆さんどっかで聞いたことあるかと思うんですけれども、貧困は繰り返すであるとか虐待は繰り返すであるとか、そういうネガティブな連鎖みたいなことが起こりやすいっていうことがあるわけですね。で、それはアメリカとかではもうずっと1980年代70年代ぐらいから関心が高くて、ずっと研究がなされてきたわけです。その人たちをどうその負の連鎖から救い出さかっていう。で、それは教育でどうやったらできるかっていうことが考えられてきたわけです。で、例えば、読み書きであるとか、いわゆる認知的なスキルっていうのを上げさせてあげるっていうことで、例えば、貧困

の連鎖から抜け出すことができないかとかいうことを色々考えたわけです。ですけれども、どうもそういうことじゃないらしいなということが分かってきたというのが、この長期縦断研究の成果です。

で、その1つのミネソタの長期縦断研究では、長期縦断研究では、ほぼ発達のリスクの高い家庭に生まれた子供を抽出して対象にしているっていうのが多いので、この研究もそうなんですけれども、やっぱりあの貧困層であったりだとか、ドラッグであったりだとか色々な中毒であったりとか子どもの発達のリスクになる家庭の状況っていうのがあるっていう子どもを対象にして追っていくわけですね。そうすると、幼児期に心理的な機能発達が不十分な子どもであっても肯定的な養育を受けていた場合に否定的な養育を受けた子どもに比べて問題が少ない、分かりますか、例えば、探索行動みたいなのをしてる時にこんなことやったりとかしますね。で、ゴンゴンゴンとやってる時に「なんか面白いことを見つけたね」っていう風に受け止めてくれる肯定的な養育なのか、「またそんなことしてちょっと貸しなさい」って言われて叱責される養育を受けてるのかっていうことです、簡単に言うと。で、実績であったりとか、子どもに恐怖を与えるような否定的な養育っていうのを受けてきた子どもに比べて、肯定的な養育を受けてきた人は、問題行動がその後その前の状態が心配な状態であってもそこで問題行動が少なく育っているってことが分かったっていうことと、もう1つは、小学校時代においても、深刻な問題行動があるっていうケースがあります。で、その差でも養育の安定性、愛着の安定性っていうのが得られている場合には、不安定な愛着関係の子に比べて、青年期、要するに思春期超えたあたりですね、の問題行動が少ないということが分かっているのですね。

【スライド⑩】安定したアタッチメントを育む（17分22秒～22分1秒）

なので、どうもやはり安定したアタッチメントっていうのは大事だということになります。なのですごく大変な心配だなっていう風に思うようなケースであっても、やっぱり安定した愛着関係がその後の育ちを回復させていくというようなことも期待されるというわけです。

じゃあ安定したアタッチメントを育むってどうすればいいんですかみたいなことになると思うんですけども、それはさっきちょっとこういうことあったらねっていう話をしましたが、やっぱりいろんなことを子どもはやってくれます。それが例えば、食事の時にスプーンを果てしなく下に落とすとかね、ポトンポトンって落としますね。で、落とすのもこっちとしては、もうまた！ってなるし、洗わなきゃいけないし、大変なわけですけども、それは子どもとしては、上から下に物が落ちるねっていうことをその仕組みを知ってきてるわけ

ですね。分かろうとしてることなんですね。で、それが面白くて面白くてやり続けるわけなんですからけれども、でもそれがもう分かりきったらやらなくなるので、一生そんなスプーンを落としてる人はいないわけですね。なので、「あ、それが今面白いんだね」って温かく受け止めつつ、でもこれねって言いながら調整していくことも大事なんですけど、基本的には面白いこと見つけたねって温かく受け止めるであるとか、無条件に何でもいいよっていうのではなくて受け入れる。「ああ、あなたはそういう風に思ったのね、感じたのね、そうか、面白いね」って、「お母さんはそう思うよ」とか「お父さんはこう思うよ」はもちろんあっていいんですけれども、人として、あなたはそういう風に思うんだね面白いねっていう風に肯定的に受け止める温かい関心を寄せるっていうことです。それが安心して自分のことを表現できるようになったり、そういうことをこう支えていくのではないかというわけですね。なので、養育者のセンシビティっていう風に書いてますけれども、敏感にその子供の気持ちとかちょっとした変化ととかいうものを察知する力ってものが大事だよっていうことが言われていたり、もう1つ、これ、専門的にはマインドマインデッドネスっていう風にこう言うんですけれども、心あるものとして子どものことを見るっていうことです。本当になんかわけの分からない行動することってあるじゃないですか。子どもって容易に理解しにくいことってたくさんあると思うんですけれども、そのよくわからないけど、なんかそれが面白いだねとか、私、大学時代にある養護学校（特別支援学校）に、インターンみたいな感じで言ってた時に、もう私も本当に右も左も分からないわけです。で、あるお子さんが砂場のへりをこう歩いていて、行ったり来たり往復しているんですけど、その一緒にいた先生もいたんですね。で、私はちょっと離れたところで違う子を見てたんですけど、その時にその砂場のへりを歩いている子が泣き出したんです。で「えっ？」て、私なんかね、なんで泣き出したんだろうって思って。で、どうしても大人っていうか一般的にはなのかわかりませんが、私はその時なんで泣き出したのかって思うんですよね。大人ってついそうじゃないですか。なんかどうしたの？なんで泣いてるの？っていう風に言葉でこう聞きたくなりますけど、その時その先生はなんて言ったかと言うと「泣きたくなっちゃったんだね」って言って背中をさすって一緒に歩いてたんです。そうすると、しばらく泣いて、でもだんだんと落ち着いてきてっていう姿を見た時に、なんか、なんで泣いたのかとかよくは分からないし、結局、何が正解だったのかも分からないけど、でも、そうやってあなたは何かを感じて何かを表現してるんだねっていう風に受け止めていてくれる人がここにいてくれるっていうことがどんなにこの人の支えになるかっていうのは、私はその時すごく感じたことでした。なので、「あ、人が人と共にあるっていうことはそういうことなんだな」って

いう風に思う、何から何まで言葉にすることは難しいけど、でも、あなたはそうやって何か感じて生きてるんだなっていう存在として見ていく、何が本当かは分かりませんし、何がその子が本当に感じているかはもしかしたら本人にも分からないかもしれないぐらい漠然としたことかもしれないんですけども、でも何かあるんだねっていう風にして見ていくってことです。

【スライド⑪】子どもは生まれながらの権利主体（22分2秒～23分6秒）

で、それがその子どもの思いとか願いとか主体性の尊重っていうことにおそらく繋がってるんじゃないかなとか、そのことをベースにして安定した、例えば、アタッチメントが形成されると育ちの保障がなされるんじゃないかなっていうようなことにも繋がっていくわけです。

が、今の話を聞いて、もうなんかすごい完璧に養育しなければと思ったりとか、すごいプレッシャーを感じて安定した愛着関係を形成しなければって1人で思ったりする必要はありませんっていう話を今日はしてきました。なので質の高い養育はすごく大事なんですけども、それは1人でやるものではありません。で、共同的に子育てをするっていうことで人間は成り立っています。アロペアレンティングとかアロマザリングとかいう言葉をお聞きになったことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、一緒に子育てをするっていう中で成り立ってきたのが子育てです。

【スライド⑫】アタッチメントの安定性とその後（23分7秒～24分20秒）

子育ては、1人の親が担いきれるものじゃありませんので、それをなんとか、みんなで分かち合っていきましょうねということなわけですけども。もう1つありました、幼い頃の愛着の安定性っていうのがどういう風に、その後の例えば、その子の、今日ご関心のあるところかもしれませんが、仲間との関係だったりとかコミュニケーションだったりとかそういういわゆる非認知能力っていうところに実は効いてるよっていう研究も出てきています。なので、幼い頃から愛着相手安定してると、例えば幼稚園とかあの色々な園に行った後で、いろんなお友達関係がより安定してより魅力的な感じで広がっていったようなことだったり、6歳時点の母親とのアタッチメントの安定性っていうのが8歳時点の仲間とのコミュニケーションとか、学びに対するモチベーションの高さ、ここがすごく大事なところなわけですね。認知的な能力そのものっていうよりも、もっと知りたい、もっと分かりたいっていうモチベーション動機付けの高さにつながってるということが分かってきてますので、そうい

う安定したアタッチメントを形成するっていうのは大事なことですけれども。

【スライド⑬】プロを頼って共同的な子育てを（24分21秒～25分4秒）

じゃあ、これ、子育ては血縁の親が全責によって行うみたいなことではございませんので安心してください。子育ては身近な専門家を頼って、貴重なこの楽しい人生の、本当に今子育てまっただ中の人、もう永遠にこれが続くと大変と思ってるかもしれませんが、永遠には絶対続かないこの貴重な時期を、是非楽しんでいただきたいなっていう風に思いますので、その身近な専門家っていうのはどこにいらっしゃるかっていうと、この中にもいらっしゃるわけですが、本当に地域の園の先生方にあの者の先生方に頼って見ていただきたと思うわけです。

（後半の動画に続く）